

第2次（令和7～16年度） 山目地区まちづくり計画

平成27年(2015年)2月に「山目地区まちづくり協議会」を設立し、その翌年に「山目地区まちづくり計画」を策定してから10年目を迎えようとしています。

山目地区は市内で一番人口が多く、少子高齢化・核家族化を起因とする地域課題は山積しており、地域に住む住民一人ひとりが関わりを持つことが求められていますが、人口が多いため人の把握が難しく、人のつながりが希薄になっていることから、『笑顔咲く、ちょっとおせっかい山目』をスローガンに掲げ、この10年間まちづくりの取り組みに邁進してきました。

第1次計画策定にあたり住民アンケートを実施した際の回答率は8.7%と低く、声をかけるなど積極的に「おせっかい」をして、住民の参加率を上げようと努力した10年でもありました。

6専門部会による地道な取り組みは、生活環境の安全安心を支え、「やまのめ桜まつり」をはじめ住民交流の場も積極的に展開したところに新型コロナウイルス感染症の流行が始まり、当協議会でも自粛せざるを得ない状況となり、地域活動を再起動しようにも再活動への住民意欲が停滞してしまったのも事実です。

私たちまちづくり協議会は、住民の安全安心の暮らしのために積極的な「おせっかい」を忘れず、「やまのめ桜まつり」をはじめ協議会事業を通じて率先して動く姿を見せることに努めるとともに、コロナ禍の経験と反省を踏まえ、今後の山目地区のまちづくりの在り方を考え、協議を重ね、『第2次山目地区まちづくり計画』を策定します。

第1次計画での主な取り組み（成果と課題）

役員会のほか総務企画部会、保健福祉部会、生活環境部会、地域安全部会、生涯学習部会、体育振興部会の6専門部会で住民ニーズや課題に対応した事業について取り組み、中でも「やまのめ桜まつり」や「やまのめスポーツフェスティバル」などオール山目として地域全体での交流や賑わいの創出を行い「山目地区まちづくり協議会」だからこそそのスケールメリットを発揮することができました。

また、地域ごとの危険個所の点検やゴミ問題などの環境対策にも触れ、地域に暮らす住民だからこそできるスモールメリットも発揮して行政提案なども行い、個人や地域団体レベルではできることには限界があることでも「山目地区まちづくり協議会」という大きな組織で取り組むことによりその効果はより大きなものとなっています。

第1次計画の10年間は山目地区全体で取り組むきっかけを創り出し、「山目地区まちづくり協議会」の存在感を出すことができたが、人口が多い山目地区でありながら協議会や民区の活動に関わる人が限られ、頼める人とやる人が固定化しているという課題は10年前から変わらず、課題の優先順位の変化がある中で個々の課題へのサポートをする時期になったと感じています。

具体には、民区や各種地域団体の活動に対し人的支援や事務支援などバックアップ体制が求められ、課題が複雑で多様化していることから、今後、より一層連携や協働の必要性が高まっています。

【策定委員から出された主な意見・課題等】

①高齢化対策

- ・生活支援
- ・行政文書の取り扱い
- ・災害時の一人暮らしの高齢者支援

②子ども対策

- ・民区PTAの限界（PTA活動は、すでに合同の動きがある）
- ・子どもの体験機会の減少（経験不足＝視野が狭い）
- ・親世代の意識向上（親の都合で判断される傾向がある）
- ・コミュニティスクールや部活動の地域移行など社会情勢の変化

③地域を知らない住民の増加

- ・民区行事への参加意識の低下（参加する理由が分からない）
- ・地域を知らないから、民区対抗など地域の看板を背負う意識がない
- ・自分、家族の命を守るため地域に参加する

④地域運営対策

- ・民区の規模に差が出てきている
- ・民区運営が難しくなっている
- ・高齢化による回覧板拒否
- ・夏祭り、子ども神輿など一民区で難しいことが増えてきている

- ・ 民区、山目全体での交流の機会が少ない、あっても参加しない
- ・ 集合住宅住民との交流ができない(参加してこない)

⑤つながり対策

- ・ 回覧板以外の周知方法の模索（高齢者は紙、若者はインターネット）
- ・ 女性活躍、女性グループによる吸引力の活用(女性が中心に立った方が良い)
- ・ 住民の危機意識が低く、助け合いの意識が低い（自分の命を守るために、つながりが必要)

以上のことから、第2次計画においては、今後益々「山目地区まちづくり協議会」のスケールメリットが発揮できるように見直しを行い、以下の3つの機能を高めることが必要と考えます。

- ① 交流機能…専門部会の連携を促し、課題に対して視野を広く考える
- ② 調整機能…全てが協議会でできないため関係機関と連携する
- ③ 応援機能…民区、地域団体、個人を応援する（バックアップ体制）

これらの機能を高めるためには、「山目地区まちづくり協議会」において課題の把握を行い協議・検討する場が不可欠となっており、今後予期せぬ事案が発生する場合を想定し、常に課題を把握しその課題に対して協議するなど柔軟に対応できる協議会となることが課題と考えます。

基本構想

1. 山目地区の将来の姿(スローガン)

山目地区の将来(10年先)の「やまのめ」・次世代につなぐ「やまのめ」を描きます。

本計画は、『山目地区まちづくり計画策定委員会』においてご提案いただいた課題や将来への希望などを反映し、第2次計画として策定するものです。

策定委員会では、直近の話題から将来に向けての課題まで数多くのご提案を頂きました。山目地区は一関市内で一番人口が多い地区ですが、そのためつながりやまとまりに欠けることもあり、「オール山目」だけではなく地区ごとの取り組みも必要となっています。

また、生活環境が整っており「子育てしやすい」「住みやすい」まちになっていますが、「必要な情報が少ない」「地域活動の維持が難しい」などの声も聞かれ、次世代につなぐまちとして変換していかなければならない時期にきています。

したがって、山目地区の現状をしっかりと踏まえ、住民同士・行政区同士のつながりをより一層深め、地域に誇りや愛着を持ち、互いに支え合う「やまのめ」を基本に据えることとし、

山目地区の将来の姿(スローガン)は、

『笑顔咲く、ちょっとおせっかい山目』 とし 継続します。

2. 将来の姿を実現するための考え方

山目地区の「将来の姿」を実現するため、目的をしっかりと持って、できることから着実に実行していくまちづくりの基本的な考え方を示します。

- (1) 年代ごとに必要な「おせっかい」を考える
- (2) オール山目と地区重視の両方で取り組み、人のつながりを作る
- (3) 子育てし易い、子どもにやさしいまちを目指す

基本計画

3. まちづくりの目標

「将来の姿」を実現するため目標を定め、それに基づきまちづくりを進めることとし、効率的かつ効果的に展開していきます。

- (1) みんなが楽しくつながるまち
- (2) 誰もが安心して安全に暮らせるまち

4. 事業方針

第1次計画の振り返りを行い、継続して取り組むことのほか新たな課題として挙げられたことを中心に、地域のニーズや状況に応じて柔軟に取り組んでいきます。

- (1) みんなが楽しくつながるいきいきとしたまちづくりを推進する
- (2) 自然環境にやさしく魅力あるまちづくりを推進する
- (3) みんなが笑顔で元気に暮らせる思いやりのあるまちづくりを推進する
- (4) みんなが安心して安全に暮らせるまちづくりを推進する
- (5) 元気な心と体でいきいきと生活できるまちづくりを推進する

5. 計画の進め方

- (1) 山目地区は、山目、赤荻、笹谷・外山の3地域から構成されるため、地域ごとの課題や地域ニーズを把握する仕組みを作る
- (2) 把握した課題は、「山目地区まちづくり協議会」で協議・検討し課題解決の方向性を示し、専門部会で調整するなど関係機関に提言・提案する準備を行う
- (3) 実行にあたって専門部会での取り組みは、興味や関心のある住民の参加を促し、関係者を増やしながら行動していく

